

『篁物語』の総合的研究 (1)

中村 一夫 (日本語学・文学科)
松野 彩 (日本文学・文学科)
仁藤 智子 (歴史学・史学地理学科)

〈経緯〉

2014年末、同じ平安時代を学ぶものとして、専門分野を超えた学際的な研究をやってみたいという中村の発案に仁藤が同意し、2015年松野が着任したことで実現が可能となった。2016年に題材として『篁物語』を取り上げることに決まり、それぞれの分野の研究手法で、『篁物語』へアプローチする試みが始まった。まさに文字通りの試行錯誤を繰り返しながらも、相互に刺激を受け、ここにその成果の一部を披露させていただくことになった。

〈題材〉

『篁物語』とは、平安時代実在の人物である小野篁を主人公とした歌物語である。成立は未詳で、平安中期から鎌倉・室町期まで、さまざまな説がある。現存する伝本は、江戸時代初期より遡らないとされる書陵部本、彰考館甲本、同乙本（原本焼失、転写本が残る）の三本と、鎌倉時代後期に書写されたと考えられる承空本である。近年、承空本が『冷泉家時雨亭叢書』に収載されたことで、この作品の成立年代と伝本、本文の研究に新たな展開が見られるようになった。

物語は二部構成をとる。第一部は大学寮の学生であった篁が、異母妹に漢籍を教えるうちに許されない恋に落ち、その結果身ごもった妹が亡くなる悲恋となる。第二部は、右大臣の娘に婿入りした篁が、亡き妹の幽霊を見て、遠い日の悲恋に涙する。

〈アプローチ〉

中村は、日本語学の立場から、主に漢字の使用状況を調査し、各伝本の本文のありようと伝本の相対的な関係性を探ろうとした。

松野は、中古文学の立場から、注釈書の本文・注釈書を丹念に比較し、新たな本文校訂・解釈の可能性を見いだそうとした。

仁藤は、歴史学の立場から、六国史をはじめとする史料に散見する篁関係記事を整理し、平安時代の一人の官人としての篁の姿を明らかにしようとした。

〈成果と課題〉

ささやかな成果は、各自の小論に譲ることにしたいが、共通の成果と課題についてはここで述べさせていただきたい。

第一に、同じ題材を調理する学問的手法の違いを再認識したことが挙げられる。広い研究世界の中でも、平安時代という共通項を持ち、互いに近しいと認識していた我々も、日本語学・文学・歴史学の手法の違いに戸惑い、己の成果を見返すばかりであった。

まず、文字を単なる記号ではなく、書写環境や成立の事情までも含み持つ表記情報として捉え直すことによって、伝本の性格や本文の相対的な関係性をうかがうことができた。

また、一字一句を解釈しながら、その矛盾や落ち着きの悪さに新たな解釈を提示できた。そして、言葉を丹念に分析することによって、『篁物語』の成立時期を特定する手がかりが得られることを確認した。

さらに、六国史を中心に、歴史書を網羅することによって、平安初期に実在した官人としての小野篁の実像や歴史的背景が浮かび上がってきた。

それぞれの研究成果が持ち寄られて俎上にあげられると、思わぬ相乗効果を生み出していき、その過程にも新たな驚きと発見があった。

第二に、一つの研究手法では決して明らかにできないことが、複数の研究手法による成果を合わせることによって、解明の可能性がでてきたことが挙げられる。

一方で、疑問や課題も明確になってきた。

- 1) 歴史書から知りうる篁像が、『篁物語』の主人公とあまりにもかけ離れていること。どのような要素や物語のモチーフが、篁をして仮託されたのか、など物語創生と形成・成立過程に再考の余地があること。
- 2) 写本の系統や伝来の過程についても、通説に再考の余地があること。
- 3) 現存する『篁物語』はすべてではなく、いくつかの部分に分かれて散逸していたものが、ある時期に寄せ合わされながら伝来してきたのではないかということ。

我々の前に次々に疑問や課題が立ち現れている。今後の共同研究につなげていきたい。